

ラフカディオ・ハーンの詩論

——特に民俗学的解釈をめぐって⁽¹⁾

榊 井 幹 生

1. ハーンのバラッド講義

1896（明治29）年9月、ハーンは東京大学での講義を始めた。その中には、「英国バラッド」に関するものが含まれ、同年12月までおこなわれた記録がある。12月外山学長に提出した報告書に、

The ancient ballad was considered in its relation to Universal Literature——as the earliest form of poetry——and in its relation to its modern literature, chiefly as an earliest influence. The modern ballad was considered as the offsprings of the old. Some attention was given to the subject of art, as strength, ——and to the value of “popular speech ” in regard to directness and force of expression.

『イギリスの古謡を、詩の最古の形として、世界文学との関係において考察、次いで近代文学との関係においては、特に最も早く影響を及ぼせるものとして考察せり。近代バラッドは古謡の所産として考察す。迫力としての技巧の問題及び表現の直截性と迫力に関して、「民衆の言葉」のもつ価値に些か注意を促し置きたり』⁽²⁾と書いている。

東京大学のエリートにバラッドのような一般に卑俗と考えられるテーマを扱うことに対し、ハーンもそれなりに含むところがあったと思われる。その意図するところは、講義録を読めばはっきりすると思う。英文学講義の最初に草の根的なところを導入しようとしたのは、いかにもハーンらしい反骨精神の表われであった。友人ヘンドリック宛の手紙（同年10月）の末尾に、

In haste to give a lecture on *ballad* literature (!).⁽³⁾

「取り急ぎまいらせ候。これからバラッド講義をいたさねばなりませぬゆえ、悪しからず」
balladをイタリック体にして強調したり、(!)をつけたりで、なにか茶目っ気な所を感じさせる。

バラッド講義で、現在われわれが活字で読むことのできるのは、English Ballads, On the Stories of the Best English Balladsの二篇で、英文は*On Poetry*（詩論）、北星堂刊、邦訳は

「ラフカディオ・ハーン著作集」第7, 13巻, 恒文社刊にある。以下著作集と略記する。

English Balladsでは、バラッド研究の意義にふれ、若干のバラッドを紹介している。しかし、具体的に、重要と思われるバラッドを数多くあげているのはOn the Stories of the Best English Balladsの方である。両者あわせると20篇近くにのぼる。ハーンが使った選集の中にFrancis James Childの*The English and Scottish Popular Ballads*がある。Childは全部で305篇のバラッドを収録しており、たとえばChild NO. 5 Bとは5番のBバージョンの意味である。

ハーンが言及したバラッドのうち、特に妖精バラッドと称するものは、いずれも小論にとって重要なものだが、Thomas Rymer (Child NO. 37) はあとで取り上げたい。

小論の目的は、ハーンのこうした古いバラッドに対する愛情と造詣が、どのように英詩講義に生かされているかを調べることである。キーツとイェイツから一篇ずつ選んで例証してみたい。

2. La Belle Dame sans Merci

この詩についてのハーンの講義はOn the Lyrical Beauties of Keatsにある。⁽⁴⁾

われわれはまず El-womanについて教えられる。

『彼女は寂しい場所の路傍に座っている。彼女は若者が近づいてくるのを見てとると、彼を誘惑しようと微笑みかけたり、^{しな}科を作ったりする。しかし、もし若者が女に接吻でもしようものなら、たちまち気違いになり、死ぬまで気が違ったままである。「^{エル}L. 女」は前半身しかない女で、彼女の後半身はまるで身のない貝殻のごとく空っぽなのである。だから彼女は若者に決して後ろ姿を見られぬよう充分気をつけている。』

(金沢豊訳)

妖精学者キャスリン・ブリッグズも同じようなことを言っている。

The defect of the Danish elves or ellewomen is that though they appeared beautiful and engaging from the front, they were hollow behind.

「デンマークの妖精、すなわちエル女は前は美しく、魅力的なのだが、後ろは空っぽなのである」⁽⁵⁾

ハーンが東京時代に出版したお伽噺「お化蜘蛛」の挿絵を思い出した。長い髪をし、痩せこけた手に提灯をもつ妖怪の女は身体の右半分がないのである。エル女は後ろが、日本の妖怪は右が空っぽ。ハーンはこの類似を面白く思ったにちがいない。⁽⁶⁾

キーツの詩の場合、エル女は騎士をmeads=meadow=grassland (草原) で待ち構えていた。うたびとトマスも草の上に寝ころんでいるとき仙女王と遭遇するのである。

1 True Thomas lay oer yond grassy bank,
And he beheld a ladie gay,

A ladie that was brisk and bold,
Come riding oer the fernie brae.
(Thomas Rymer Child 37A) ⁽⁷⁾

正直ものトマスが野原で寝ころんでいると

粋^{いき}な女がみえました

女は颯^{さつ}爽^{そう}堂々と馬に乗り

羊^し齒^だの丘を越えてやってきた

(藪下卓郎訳) ⁽⁸⁾

わが国でも古来より、峠、国境、橋などには強力な地霊が住むという俗信があり、橋姫伝説や、道祖神などつとに知られており、かの有間皇子が紀州に行くとき、磐代で松の枝を結んだり、椎の葉に飯を盛^{いひ}って供え、旅の無事を祈った故事はあまりにも有名である。バラッドの世界でも、魔物が出没する場所は決まっているようで、Tam Lin (Child NO. 39) ではカーターホー (Carter-haugh) の森はよく知られている。⁽⁹⁾

さてキーツの詩にもどろう。

She looked at me as she did love,
And made sweet moan. (19-20)

恋する如く 我を見て

洩らすよ 優しき声をば

(金沢豊訳) ⁽¹⁰⁾

この二行、ハーンはつぎのようにコメントする。

『「L. 女たち」の一つの特徴は言葉を喋れないことである。彼女らはただ悲しげな声を発するだけである。彼女らは歌らしきものを歌うのだが、言葉は喋らない。』20行目のようにsweet moan (甘いうめき声) をもらすだけである。

For side-long would she bend, and sing
A faery's song. (23-24)

横様に身を屈^{こご}め

歌うよ 妖精^{あやかし}の歌

ハーンは、その講義ではふれていないが、ハーンに替わってコメントしたいのは、つぎにでてくる妖精の食べ物に関する俗信である。

She found me roots of relish sweet,

And honey wild, and manna-dew;

(25-26)

女子 我にと 甘き草の根

野生の蜜と 甘露^{マナ} 見附け出す

‘食べた’とは明言してないが、she found meとあるから実際口にしたと思われる。妖精の虜になる条件の一つは仙界のものを食べることである。うたびとトマスは

10 ‘But I have a loaf here in my lap,

Likewise a bottle of claret wine,

And now ere we go farther on,

We’ll rest a while, and ye may dine.’ (Child NO. 37A)

「パンがひとやま ワインがひと^{びん}瓶

わたしの膝にこれこのとおり

先を急ぐそのまえに

しばらくやすんで さあめしあがれ」⁽¹¹⁾ (薮下卓郎訳)

このように仙女王にすすめられ、パンと赤ぶどう酒を口に入れたため、虜になってしまうのである。このテーマは後述のイエイツもその妖精詩に用いている。

さて、この二行に続く同じスタンザで、ハーンは興味深い解釈を示してくれる。

And sure in language strange she said,

“I love thee true!”

(27-28)

耳慣れぬ言葉にて しかと言へり

「誠に汝^なを恋せり」と

『「しかと」という言葉に注意されよ。それは疑っている証左である。騎士は彼女が本当に自分にこう言ったのだと納得しようとしている。だが彼女はそんなことは言わなかったし、言うこともできないのだ。彼女はただ騎士が言葉だと思い込んだ言葉ならざる音をたてたにすぎぬ。』⁽¹²⁾

ただ一語、「しかと」(sure)にこれほどのものを読み込むハーンの力量に感心せざるを得ない。

つぎに人間が妖精の虜になる第二の条件は‘接吻’である。キーツのこの詩に関しては、ハーンは何も言っていないが、「うたびとトマス」について言及した論文に以下のようなコメントがある。

- 5 'Harp and carp, Thomas,' she said,
 'Harp and carp along wi me,
And if ye dare to kiss my lips,
 Sure of your bodie I will be.'
 (Thomas Rymer Child 37C)

豎琴にあわせうたうのだ、トマスよ

 琴を弾き、うたいながらついてくるのだ

もし妾に口づけしようものなら

 おまえの身体は妾のおもうまま⁽¹³⁾

(筆者訳)

それでも『トマスは恐れずに女王に口づけする。その時から、トマスは女王の奴隷になり、女王はトマスを七年の間、妖精の国につれて行く。』⁽¹⁴⁾

この世のものではない者、ときには死者も含むが、そんなものにキスをすると、肉体も魂も奪われるという俗信を示すバラッドの例は他にもある。

- 5 'You crave one kiss of my clay-cold lips;
 But my breath smells earthy strong;
If you have one kiss of my clay-cold lips,
 Your time will not be long.

 (The Unquiet Grave Child 78A)⁽¹⁵⁾

「土のように冷たいこの唇に 接吻をしたいだって

 わたしの息は土くさい

土のように冷たいこの唇に 接吻をすれば

 あなたの命は長くない

(薮下卓郎訳)⁽¹⁶⁾

これは女の亡霊から男へ。つぎの例は男の亡霊から女へ。

- 4 'My mouth it is full cold, Margret.
 It has the smell now of the ground;
And if I kiss thy comely mouth,
 Thy life-days will not be long.
 (Sweet William's Ghost Child 77B)⁽¹⁷⁾

「ぼくの唇はとても冷たい マーガレット

いまでは土の臭いがする
おまえの唇に接吻をすれば
おまえの命は長くない

(藪下卓郎訳) ⁽¹⁸⁾

ついでだが、Shakespeare の *Romeo and Juliet* にある Friar Laurence のセリフ

Lady, come from that nest / Of death, contagion... (V. III 151~2)

では contagion = contagious or poisonous influence で、これらのバラッドと同じような考え方によるものだろう。

さてキーツの騎士も

And there I shut her wild, wild eyes

With kisses four.

(31-32)

狂おしきその眼^{まなこ}

四度^{よたび} 接吻もて塞ぐ^{ふた}

その結果騎士は、

And there she lulled me asleep

And there I dreamed, ah! woe betide!

(33-34)

女子に 眠らされ

夢を 見ぬ—— おお 曲曲しきよ!

と言った状態になるのである。

こうして古いバラッドの手法を借りたキーツは、己が身を焼く F. ブローンとの恋を妖精に魅入られた騎士にことよせて歌ったのである。ハーンは言う、

『誠めの言葉を聞いても、なおも彼は立ち去ることができぬ。呪縛されているから、彼は死ぬまでそこらあたりを彷徨っていることだろうことがわれわれにはわかる。この詩を書きながら、かわいそうなキーツは、似たような己が境界を確かに想っていたにちがいがなかった。自分には情け知らずの妖婦のようなもの以上にはなり得ぬ女を、身を滅ぼしつつある恋情をもって、空しく愛していた己が身の上を。』⁽¹⁹⁾

3. The Host of the Air ⁽²⁰⁾

ハーンが妖精の世界と心が通い合う資質を持っていたのは、ケルトの血のなせるわざであろうか。その世界への深い理解は Some Fairy Literature と題する講義を読めばよく分かると思う。この講

義でハーンが引用したイエイツの妖精詩, The Host of the Air (天駆ける妖精群) を調べ, さきに述べたキーツの詩と比較してみたい。

オドリスコルという若者が, 遊び半分に野鴨を追いたてている。ハーンに言わせると, 鳥は妖精たちの保護を受けているので, 無暗にいじめると必ずひどい仕返しを受けるのだそうだ。このあたりハーンの再話「オシドリ」を思い起こさせる。また多少趣は異なるが, わが万葉びとも, 鳥は魂の保管者・運搬者と考えていたという民俗学的に見る説がある。白鳥・雁・鴨・鶴などがそうで, 挽歌によく用いられるらしい。

ももづたふ 磬余の池に鳴く鴨を, 今日のみ見てや 雲隠りなむ (巻3・416)

と歌った大津皇子は, やがて我が身を離れる魂を鴨に託し,

近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ (巻3・266)

と歌った人麻呂は千鳥に今は亡き近江古京の大宮人の霊を見たのだろうか。⁽²¹⁾

さてオドリスコルが夢見心地になる瞬間から, すでに妖精たちの復讐が始まっているのである。遠くからバグ・パイプの音が響いてくる。勿論妖精が吹くものだ。その渺渺たるパイプの音は, 人間の心を虜にする魔力があるらしい。やはり古いバラッドThe Elfin Knight (Child NO. 2) (妖精の騎士) にもパイプの音が乙女の心を奪う話がある。

さて, その音色は, 次の二行で表現されるものである。

And never was piping so sad,

And never was piping so gay.

(11-12)

そは たぐいない哀しみの音を,

そは たぐいない悦びの音をかなでた。 (尾島庄太郎訳) ⁽²²⁾

ハーンのコメントを見よう。

『この短い詩文は見かけは単純だが, 一読しただけでは諸君が気づかないような, 妖精信仰についての多くの知識を含んでいる。おそらく諸君は, 楽の音が悲しいと同時に楽しげでもあるとうたわれ, また花嫁の顔が悲しくもあり陽気でもあるとうたわれた矛盾には気づかなかつたろう。妖精がそこにいるとわかる徴候の一つは, ほほえんだり笑うときでさえ, 何かしらとても悲しげな気配が, 声の調子と目つきに表われてしまうことである。だから, 妖精が奏でる楽調には, どんなに陽気に聞こえても, 胸を刺すようなもの悲しい音色がある。』⁽²³⁾

すでにキーツの騎士が食べた妖精の食べ物ことは, 「うたびとトマス」の例も引き説明したとおりだが, オドリスコルの場合もやはりこの罠に落ちる。

And a young man brought him red wine

And a young girl white bread.

(19-20)

若者 オドリスコルに 赤き酒を持ち来たり,

乙女 オドリスコルに 白きパン持ちきたれり。 (筆者訳)

オドリスコルは、この饗應を受けるのだが、

The bread and the wine had a doom, (25)
かのパンと酒には 呪いありき。 (筆者訳)

この呪いには気がつかなかった。これで完全に金縛りになったオドリスコルは妖精たちに新妻ブリジットが連れ去られるとき、どうにもならなかったのである。オドリスコルはきっと妖精たちが食べ物を持って来たとき、妻ブリジットが何故強引にオドリスコルの袖をつかみ、カード遊びをしていた老人のところへ連れて行ったのかがやっとのみこめたであろう。でも遅かった。オドリスコルはあわててトランプの札を捨てる。ふとわれに戻ると、

But the old men and dancers were gone,
As a cloud faded into the sky. (39-40)
年寄り、踊り子ともになく、
あたかも雲、空に吸われ行くごとし。 (浜田泉訳)

で、自分はだれもない野原にとり残されているのだ。あたかもキーツの騎士が夢からさめて‘冷たき 岡の^{ほと}辺り’ (On the cold hill's side) に己の姿を見いだしたごとく。オドリスコルは一種胸騒ぎがして新妻ブリジットのいる我が家にとんで帰る。果たして妻は死に、その遺骸のまわりには老女たちが囲み、泣唱 (keening) しているのである。⁽²⁴⁾

そして見上げる空から、またあのバグ・パイプの調べが漂ってくるのである。

And never was piping so sad,
And never was piping so gay ! (47-48)

この折り返しは、キーツの

Though the sedge is withered from the lake,
And no birds sing ! (47-48)
されど湖に 菅枯れ
鳥は 啼かず

という荒涼たる趣はないにしても、北国の荒野に響くバグ・パイプの音を彷彿とさせ、とても味わ

いがあると思う。

4. 結びにかえて

ハーンは英文学、特に英詩の研究にバラッドが欠かせないことを熱っぽく語った。

『ざっと数えてすら、ワーズワス、コールリッジ、キーツ、バイロン、シェリー、ウォルター・スコット卿、テニスン、ブラウニング夫妻、ロセッティ、スウインバーンなどの詩人たちが、このようなバラッドもどきの物語詩を試みている。このような証拠を突きつけられているのに、バラッド研究が学問に値しないなどとうそぶくのは愚かなことであろう。』⁽²⁵⁾

また別のところでは

『19世紀の大詩人は、彼等が多くを学んだバラッドに関して多少なりとも知識がなければ真に理解できぬだろう。』⁽²⁶⁾

とまで言い切っている。いまわれわれはハーンのこの考えをキーツの詩の解釈で確かめたのである。

またイエイツの詩については、おなじアイルランド出身で、民俗学的な好みを持つという共通点でハーンの目にとまったものであろうか。一つの興味深い解釈を示してくれた。多分イエイツの詩、特に中期以前の詩を真に理解するにはもっとケルトの神話、俗信に目を向けなければならないだろう。

とかく低俗なものと敬遠されがちなこの方面にも、暖い人間味あふれる眼差しを向けることにより、英詩研究の一つの方法を教えてくれたことは、ハーンの一大功績と言ってもよいであろう。

補 注

3 頁 妖精との出会いの場は境界や森のほか、泉や井戸、丘などもある。Clerk Colvill (Child 42) では井戸で出会う。

4 頁 食事のタブーについては、日本神話のイザナギ、イザナミの物語にもあらわれる。黄泉戸喫（よもつへぐい）。またギリシャ神話ではペルセポネが食べたザクロはよく知られている。

7 頁 霊魂が鳥の姿をとることについてはトンプソンのモチーフ・インデックスE732にある。イギリスの昔話「バラの木」では継母に殺された女の子が鳥の姿になって復讐を果たす。

以上の補注は美濃部京子氏（奈良女子大学博士課程）のご教示による。

いささか蛇足とも思われるが、小論でとりあげた二篇の英詩のうちキーツのものは、どのアンソロジーにも入っているが、イエイツのものは一般に流布しているものの中に含まれていないスタンザがあるので、つぎに資料として二篇とも原詩をあげておく。

資 料 A

La Belle Dame sans Merci

O what can ail thee, Knight-at-arms,
Alone and palely loitering?
The sedge is withered from the lake,
And no birds sing.

O what can ail thee, Knight-at-arms, 5
So haggard and so woe-begone?
The squirrel's granary is full,
And the harvest's done.

I see a lily on thy brow,
With anguish moist and fever-dew; 10
And on thy cheeks a fading rose
Fast withereth too.

I met a lady in the meads,
Full beautiful, a faery's child;
Her hair was long, her foot was light, 15
And her eyes were wild.

I made a garland for her head,
And bracelets too, and fragrant zone;
She looked at me as she did love,
And made sweet moan. 20

I set her on my pacing steed,
And nothing else saw all day long;
For side-long would she bend, and sing
A faery's song.

She found me roots of relish sweet, 25

And honey wild, and manna-dew;

And sure in language strange she said,

“ I love thee true ! ”

She took me to her elfin grot,

And there she wept, and sighed full sore; 30

And there I shut her wild, wild eyes

With kisses four.

And there she lulled me asleep

And there I dreamed, ah ! woe betide !

The latest dream I ever dreamed 35

On the cold hill's side.

I saw pale kings and princes too,

Pale warriors, death-pale were they all;

They cried—— “ La Belle Dame sans Merci

Hath thee in thrall ! ” 40

I saw their starved lips in the gloam

With horrid warning gaped wide,

And I awoke, and found me here

On the cold hill's side.

And this is why I sojourn here, 45

Alone and palely loitering,

Though the sedge is withered from the lake,

And no birds sing !

(*INTERPRETATIONS OF LITERATURE* Ed. by John Erskine Vol. I

XIV On the Lyrical Beauties of Keats P. 188—190)

資 料 B

The Host of the Air

O'Driscoll drove with a song,
The wild duck and the drake,
From the tall and the tufted reeds
Of the drear Hart Lake.

And he saw how the reeds grew dark
At the coming of night tide,
And dreamed of the long dim hair
Of Bridget his bride.

He heard while he sang and dreamed
A piper piping away,
And never was piping so sad,
And never was piping so gay.

And he saw young men and young girls
Who danced on a level place
And Bridget his bride among them,
With a sad and a gay face.

The dancers crowded about him,
And many a sweet thing said,
And a young man brought him red wine
And a young girl white bread.

But Bridget drew him by the sleeve,
Away from the merry bands,
To old men playing at cards
With a twinkling of ancient hands.

The bread and the wine had a doom, 25
For these were the host of the air;
He sat and played in a dream
Of her long dim hair.

He played with the merry old men
And thought not of evil chance, 30
Until one bore Bridget his bride
Away from the merry dance.

He bore her away in his arms,
The handsomest young man there,
And his neck and his breast and his arms 35
Were drowned in her long dim hair.

O'Driscoll got up from the grass
And scattered the cards with a cry;
But the old men and dancers were gone,
As a cloud faded into the sky. 40

He knew now the host of the air,
And his heart was blackened by dread;
And he ran to the door of his house : —
Old women were keening the dead.

But he heard high up in the air 45
A piper piping away,
And never was piping so sad,
And never was piping so gay !

(ON POETRY X Ⅲ Some Fairy Literature
p. 254—5 The Hokuseido Press 昭48)

注

- (1) 小論は昭和63年日本英文学会中国四国支部第41回大会での口頭発表を加筆・訂正したものである。
- (2) 原 一郎 「バラッド研究序説」南雲堂 p. 176
- (3) *Lafcadio Hearn* XV. p. 40 Houghton Mifflin 1923 筆者訳
- (4) *Interpretations of Literature* ed. by John Erskine Vol. I XIV pp. 180
著作集 6 p. 224
- (5) K. Briggs *A Dictionary of Fairies* Penguin p. 122 筆者訳
- (6) 「蜘蛛」 長谷川武次郎発行 明治32年
- (7) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. I p. 323
- (8) 藪下・山中 「バラッド詩集」音羽書房 p. 32
- (9) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. I pp. 335
- (10) キーツの訳詩は別に断らぬかざり金沢訳である。
- (11) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. I p. 324
- (12) 前掲 *Interpretations* I. p.189 著作集6 p. 236
- (13) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. I p. 325
- (14) 前掲 *On Poetry* (北星堂) p. 34 著作集13 p. 30 遠田勝訳
- (15) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. II p. 236
- (16) 前掲 「バラッド詩集」 p. 24
- (17) F. J. Child 前掲書 (Dover Publications) Vol. II p. 230
- (18) 前掲 「バラッド詩集」 p. 55
- (19) 前掲 *Interpretations* I p. 190 著作集6 p. 237
- (20) 前掲 *On Poetry* pp. 252 著作集9 (浜田泉訳) pp. 353
- (21) 山本・池田共著「萬葉百歌」(中公新書) p. 17
- (22) 「イエイツ詩集」(北星堂) p. 44
- (23) 前掲 *On Poetry* p. 256 著作集9 (浜田泉訳) p. 359
- (24) Macmillanの選集では、次のスタンザが欠けている。
He knew now the host of the air,
And his heart was blackened by dread;
And he ran to the door of his house:—
Old women were keening the dead.
- (25) 前掲 *On Poetry* II English Ballads p. 14, 著作集7 p. 119 筆者訳
- (26) 前掲 *On Poetry* III On the Stories of the Best English Ballads p. 24
著作集13 p. 18 筆者訳